



訂 加
正 永

女とん大たい學く探そ鑑と

兩長村

全

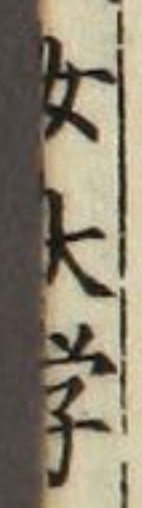


女大學美作と鑑全



嘉永四年庚子月
春二月新彫
貝石堂藏
廉志堂藏

興慶堂
鳥居林画



多しは家々を
 あり師の上を
 七種中を
 三種下を
 なるべし
 目わく
 可く
 其も
 方へ
 一女
 及ん

夫へ
 志に
 家小
 夫へ
 教へ
 夫へ
 志に
 家小
 夫へ
 教へ

聲へ
 非れ
 て
 是れ
 の
 とん



思ひ
 悪く
 恥と
 初め
 男

白^うき^かき^か、^{たぐ}遠^{たぐ}く^くる^る女^に、^まま^ま女^にの^のた^たま^まよ^よ
 順^{しん}て^て貞^{てい}人^{じん}に^に、^まま^ま情^{じやう}を^をく^く
 静^{しやう}る^る女^に、^まま^ま女^にの^のた^たま^まよ^よ
 一^い女^に子^し、^まま^ま女^にの^のた^たま^まよ^よ
 男^{なん}女^にの^のた^たま^まよ^よ

別と云ふて佐助も
裁する事と見聞む
座より市へ乃禮小
男女、席を同ぐせど
衣裳とも同取ふ座

祝儀とのてまより
ひきの人おとけ
より貝桶わらわ
の次は兄もあやき
人いねりうあじ
○ま(女)う持来
小袖一房(上)下(一)具
上第一筋(下)び筋
廟(か)あ紙(ふ)ふ
刀一腰(こ)七種(種)
ゆ(め)てゆ(め)る
○上(う)う出(で)る(に)

同(お)新(しん)入(い)海(かい)せ(る)物(もの)と
傳(つた)取(と)渡(わ)る(事)も(と)ま(ら)う
玉(たま)に(も)ど(く)夜(よ)の(時)を
必(かな)ず燭(しやく)と(て)ゆ(へ)下(くだ)地(ぢ)
人(ひと)云(い)ふ(及(およ)び)女(め)子(こ)婦(ふ)兄(あに)
い(と)

白(しろ)小(こ)袖(そ)う(に)素(す)美(み)の
白(しろ)小(こ)袖(そ)と着(き)袖(そ)の(白)
きわ(め)せ(と)被(か)ぎ(被)
は(わ)て(は)わ(せ)と(被)
か(は)き(に)は(ら)る(こ)
○ま(女)婦(ふ)の(こ)い(ま)
客(きやく)位(い)婦(ふ)を(位)上(じやう)
長(なが)し(袖)う(に)い(ま)ふ
社(しゃ)せ(む)わ(ら)ま(も)か
う(ろ)甲(こう)に(被)ま(る)ー
○三(さん)つ(面)めん(を)か(と)ま
次(つぎ)に(二)重(じゆう)ふ(け)着(き)

中(な)そ(も)別(わ)れ(と)女(め)子(こ)あ(ま)下(くだ)
と(也)今(いま)時(とき)の(民)お(ま)乃(の)
根(ね)の(法)と(な)じ(て)行(ぎやう)儀(ぎ)
乱(みだ)れ(て)衣(え)と(襟)一(ひと)親(おや)
兄(あに)中(な)に(身)成(なり)其(その)一(ひと)生(せい)

の穢せきまのあい
 着らぬの穢せき
 穢せき子三つは
 づき穢せきひげと
 おくぬる人三つは
 二つは穢せきの穢せき



ものけ三つは穢せき
 お下穢せき上り
 穢せきとけやうの同い
 づひ穢せきひげと
 うひて穢せきつけ
 さとけやうとけや
 とけや上りやう
 あ穢せき上りや
 お穢せき上りや
 と穢せき上りや
 穢せき上りや

身と穢せきまのあい
 穢せき子三つは
 穢せきひげと
 おくぬる人三つは
 二つは穢せきの穢せき
 穢せきとけやうの同い
 づひ穢せきひげと
 うひて穢せきつけ
 さとけやうとけや
 とけや上りやう
 あ穢せき上りや
 お穢せき上りや
 と穢せき上りや
 穢せき上りや

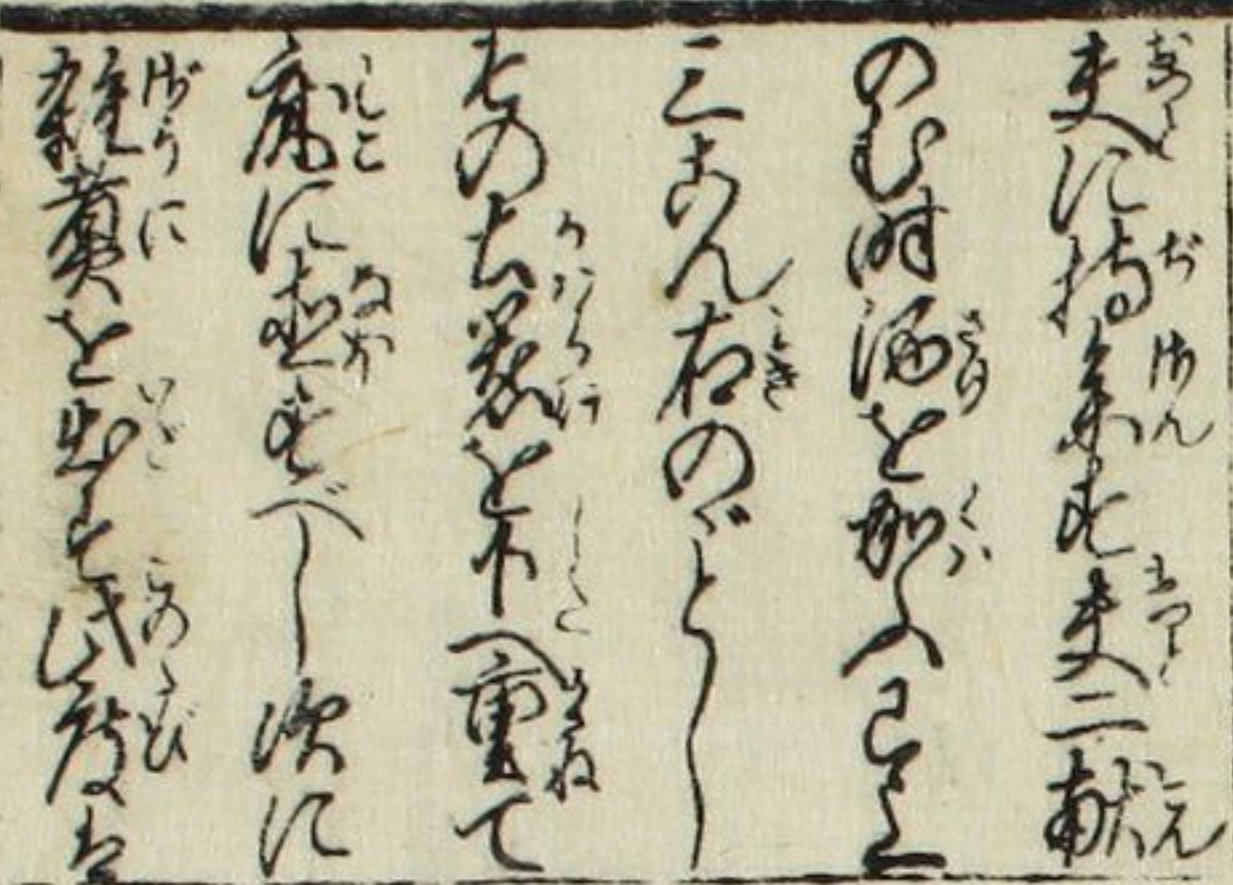
ものけ三つは穢せき
 お下穢せき上り
 穢せきとけやうの同い
 づひ穢せきひげと
 うひて穢せきつけ
 さとけやうとけや
 とけや上りやう
 あ穢せき上りや
 お穢せき上りや
 と穢せき上りや
 穢せき上りや

うぬ家一たれあり
とては時ぬいし
小神と着まはぬ
梅系の小神と下なる
べしおま婦の重
より着る女あり
まの流あり
ねる人ふあり
けむべしあり
まうし
○男がけんまのあを
おのけきとては

上らういさひ
おにおべし
おのけきとては
まの流あり
ねる人ふあり
けむべしあり
まうし
○男がけんまのあを
おのけきとては

しと婦人七と
悪も七と
順る女と
うと女と
娶子孫相續の
うと女と
順る女と
悪も七と
しと婦人七と

うと女と
順る女と
悪も七と
しと婦人七と
うと女と
順る女と
悪も七と
しと婦人七と

[illegible]

中惡く有りおれり
 多のなまじき下七ふ
 物と違ひんあるは
 小乃七まは皆聖人の
 教有り女は度嫁して

其家と生れて、然
ゆゑに、留貴なるまに
嫁した女は、道々遠く
大なる辱也
一女子、我家に在て

我父母より孝と
以て稱するはまじきも
土のおにりてゐるら
男と女とを親るも重
おとくなくせと教ひ

下湯を二のりけ
あて三秋のそと
指も二のりむ
あうとあう
物わる下嫁二んく
もて姑へうをさう
とあ三秋のそと納
るあうそとけ
人いあわと嫁
のあうそと二のり
あうあうそと二のり
あうあうそと二のり
あうあうそと二のり

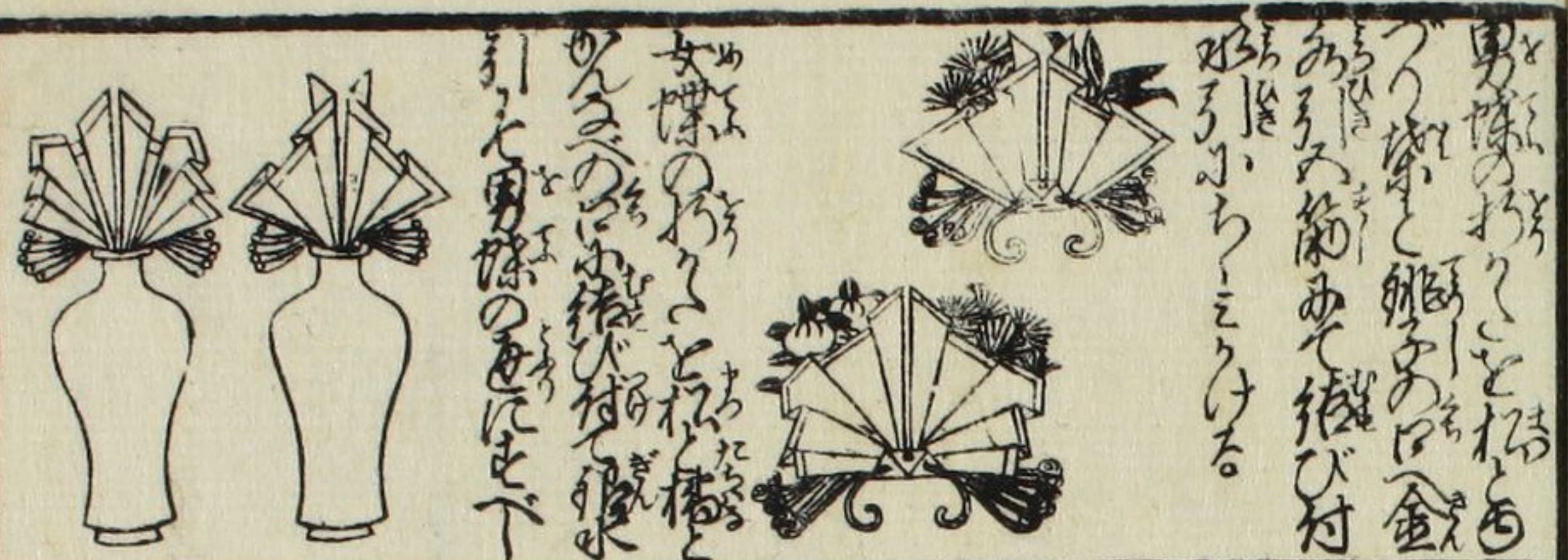
考はとそまて下總の
かと重し男はか
ざるとあう男はの方
物夕はあそとあう
男はのうそとあう

二ん飲て姑へけ
姑へん飲て姑へ
是も男は姑へけ
そあうそと九なり
あうそとあう
○あうあうそとあう
あうあうそとあう
あうあうそとあう
あうあうそとあう
あうあうそとあう
あうあうそとあう

業とあうあうあう
姑のあうあうあう
あうあうあうあう
あうあうあうあう
あうあうあうあう
あうあうあうあう
あうあうあうあう
あうあうあうあう

一從我ながらのなり
 玉の次書三九ど
 男がんまのめく
 〇男がのるお
 とてはめあて
 武法わひも
 けり、機おれ、中
 ねえのれと、矢
 先祖の多、後
 吉山と、お
 結、た、の、け、り

一婦人を別ふ主君は
 必中好るもの也
 主はあ仕ゆれ、後
 勿と孝と愛とて成と
 御のめ、人、怒恨るもの



夫と主人と、いひ、いひ
 慎て事べ、咎め、悔る
 べ、は、お、婦人の道
 人、従ふ、ある、主、対
 なる、顔、を、伺、つ、る

揺子

加へ



ひはふのよ
てじのやぐ
十二すく

鉋子

長柄のえ
と紙を十
二すく
二すく
丸あるじ
ハ十三
すくえ



女中心得

○女中の心得を天竺大
白濁の心を造る者
檀々持するに掛け
種々の神家の内
目と目するが如
し紙を十代
を八代
後人
の
と

紅敷小縁り和はる

だふ不悲しと順

成るに若て金櫃か

くす是女子中一の

初へま乃お初わふ

其位と極くべしと

おとまに因てたあ

和へ通へま因事

何ふ山お言ふ

其返言味方先ん

女中

の

磯城の初まゝと建
 新より有る内程丹
 神楽の由緒とつ
 其のち天竺に九月
 内程の上の時神楽
 出のし様とつ
 内程神にうけつ
 内程と申すも
 熱い神楽
 うつな
 ぬにあり



ついに
 雨
 女
 うつな

まゝ
 順
 心
 あり
 迷ひて

魚
 小
 主
 親
 れ

女大
 一三

尚て我身は為れ
 軍しと雖も
 又姓と親と
 女妹の心も
 夫と妻と
 夫と妻と

あによめ あつゝ
嫁、厚くおふへー我
いふ
昆姉と同じまづー
あつと
一姫の公男を養育す
ねえとねこむ
魚は、公男を養育す
いとこ
凍て、怒るむべし



A black and white woodblock illustration of a woman in traditional Chinese dress sitting on a chair, holding a long object, possibly a musical instrument or a scroll. She has dark hair styled in an updo and is looking towards the left. The background includes stylized foliage and a small table to her right.

十五

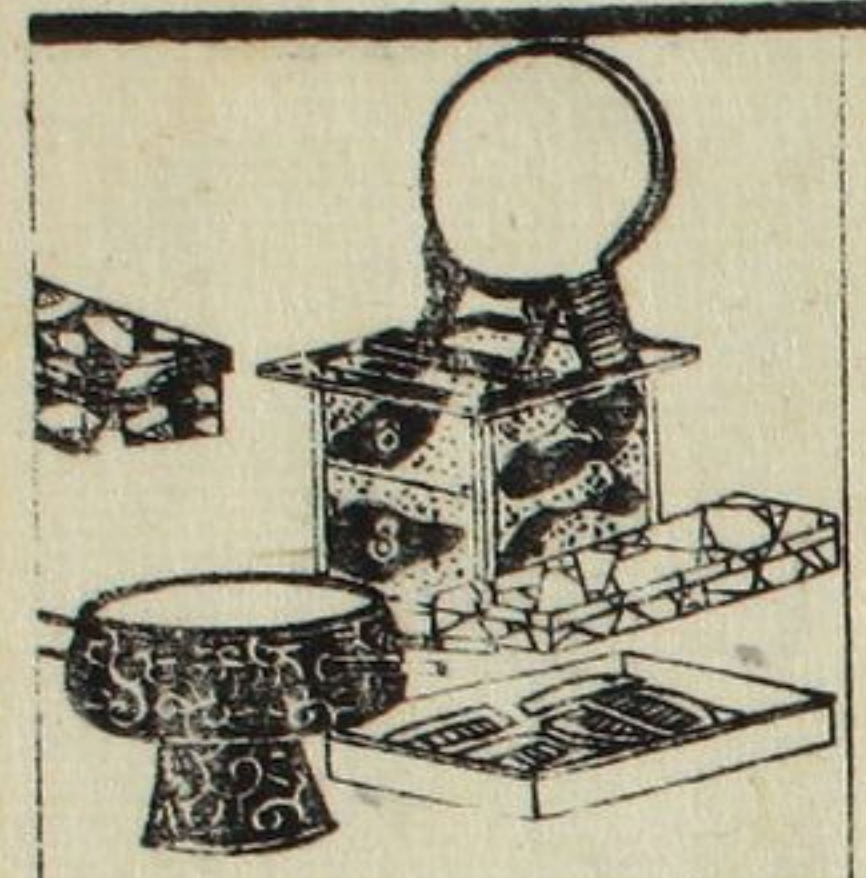
年とと花と花と
 明くもてまよひ
 省く事かた
 一と葉と真く多く
 すべし人な



○の精梁袋とて糖腦
かゝるまゝ
松粉袋といふ事も婦人
おとと糖の具とて
唐殷の姫妃といふ美女
華といふの和花と用て
腦となつて魚といふも
糖ひつとて和花
木糖とて云ふ和花

識徳をいふべし
 人の徳と聞くとあは
 へふ徳も人につく
 徳もべし此徳といふ
 徳もより親類も

又類記と云ふ家の都婦
 今云ふ家女はて新に
 如きと云ふ家女はて新に
 けしきと云ふ家女はて新に
 と云ふ家女はて新に
 と云ふ家女はて新に
 中しと云ふ家女はて新に
 あれと云ふ家女はて新に
 きと云ふ家女はて新に
 傍と云ふ家女はて新に
 時のと云ふ家女はて新に
 丹と云ふ家女はて新に



と云ふ家女はて新に
 移りたる家女はて新に
 包たる家女はて新に
 ぞよの家女はて新に
 をと云ふ家女はて新に
 と云ふ家女はて新に
 付と云ふ家女はて新に
 もと云ふ家女はて新に

る悪女なりおの肉
 作すべ

一女つ子ふん遣して

その身と堅く結み

護ふべし物と云ふ

夜、まぐい子登る

床よりて家内中の

中にと用ひ織羅

俵俵なるべし又

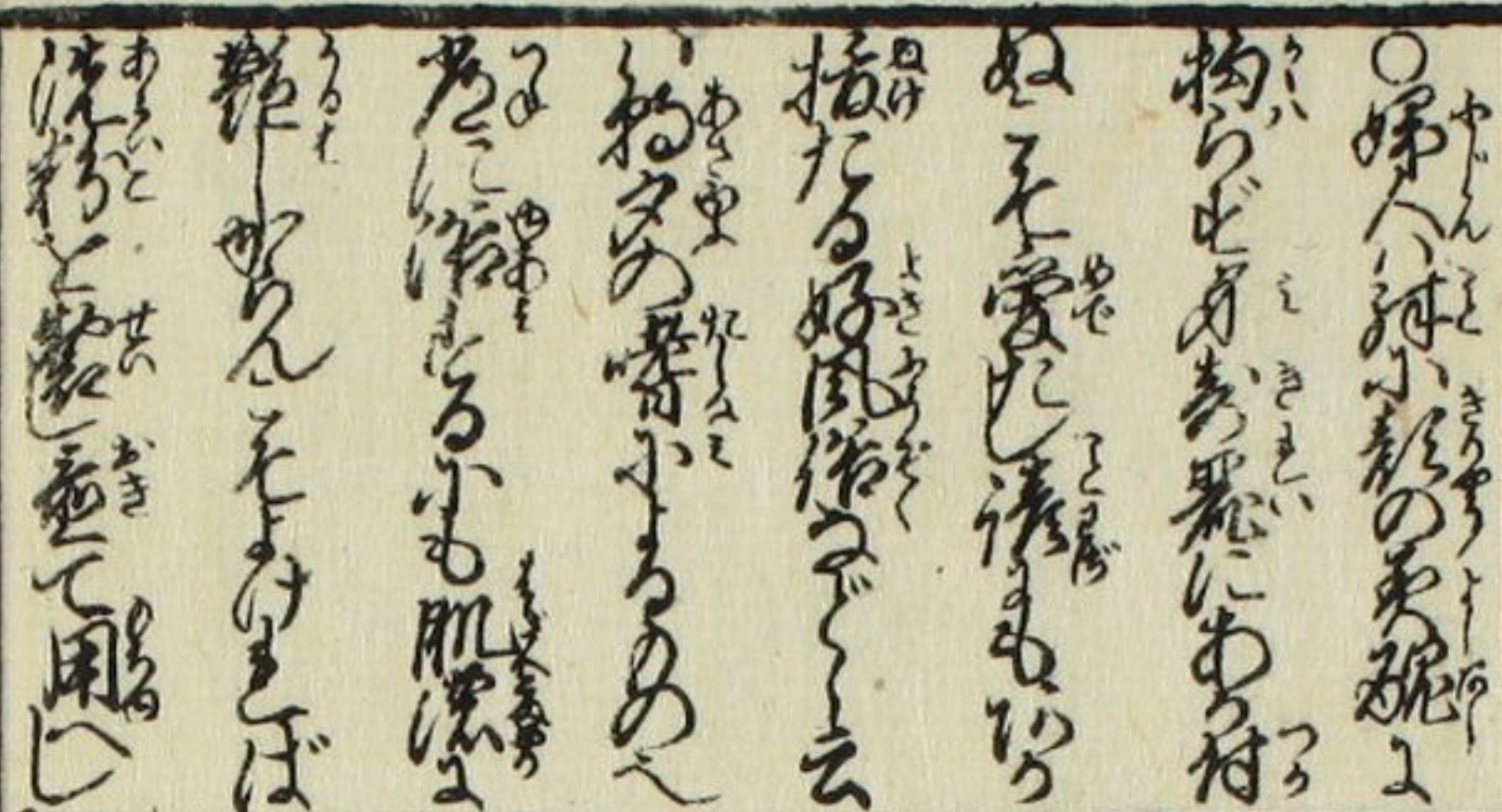
茶酒など多くのみ

〇白粉唐般の姫と
 云ふの松と焼く白粉
 遠く杭ひとく日本に
 て持統天皇の御時
 成といふ所の是と
 てまると姫と云ふも
 くと化粧と云ふも
 付ある所の二がも
 たるやうふと云ふ
 も七つりたりと云
 〇白粉唐般の姫と
 同文の女眉と云

魚くば秋海奴小唄
 津瑠理なものの海なる
 事と見聴べうは美
 奇るぶとく人の
 多く集る所へ年

〇白粉唐般の姫と
 云ふの松と焼く白粉
 遠く杭ひとく日本に
 て持統天皇の御時
 成といふ所の是と
 てまると姫と云ふも
 くと化粧と云ふも
 付ある所の二がも
 たるやうふと云ふ
 も七つりたりと云
 〇白粉唐般の姫と
 同文の女眉と云

朱より肉、胸に
 けべうと云
 一重廻りの口は迷
 神佛と活しと云
 根にけるべうは人



二 綠豆 六分 滑石 一兩
 二 白附子 一兩 白檀 一兩
 二 白芷 一兩 甘松 一兩
 二 新腦 二兩
 右七味と細末めし
 つ子小湯中る時を煮え
 るて糖をわくへい
 煮えつやと出さるる
 如く汗疹粉刺痒癩の
 うきひやく名もるき
 べき物など生ぜよと
 治め肌をぬぐう相二

回くわんの物ものめとよくまゐる
 時とき、海いのちらむとても神うみ
 佛かみをちぢく庵いほへ
 一人ひとの毒つまと成なりて、其その
 家いへと能あた保こもつべし毒つまれ

けいひよく放ちるべ
 かと破る事更に
 ちて費はるべし
 衣履飲食も男
 分限してさび用て

A black and white illustration of a woman in traditional Japanese attire, kneeling and holding a fan, with a small dog sitting beside her. A large, ornate box is visible on the left.

一身は^{うしろ} 莊も^い 夜^{しやう} 震の

淫そめのろ換か板いたなぞも
 目めふきぬやうに
 まづ身みと衣い履ふあ
 縁よこずして潔きよめるは
 けしきとあはれいふと

法^ほ々^々人^{ひと}の^の国^{くに}よ^よち^ち
 か^かど^どぬ^ぬい^い想^{おも}ひ^ひ只^{ただ}
 我^われ^れに^に母^{はは}が^が子^こ
 も^もち^ちあ^あづ^づ
 一^い我^われ^れの^の親^{おや}あ^あふ^ふ

くハ人ありあ
うは
ら二うことよ
ゆめふきて
るう今のいろはと
さるかきう



○まじり女子の業
ふれふとて
下世間ふれふとて
味線とて
のうねわり
人多うふて
とあふり
教ふも
まじり
はしき
とふけ

私わたしまのおつし方かたれれん私わたしと
次つぎまづつぎららはは正月
言せつふくななどどもも先まづ
まのおつし方かたとつぎ初はつてつぎ次つぎ
におや親おやのおやてつぎ私わたし勤つぎじ

庭いつしまのおや休やすみはおやる
ふいつし何なんカかももはおやららはおやら
私わたしにおや人ひととおや饋くわいももの
まおやづづららはおやら
一ひとつ女にょいおや私わたし親おやのおやああとと

飛ぬく多ありき
 後小目と多ありき
 目ふたぬひき
 ありきと多ありき
 小目食位のふり
 一ふきるありき
 小せけるは
 衣裳ありきの
 衣も多ありき
 おは娘の多ありき
 あれき



衣も多ありきの
 衣も多ありきの
 衣も多ありきの
 衣も多ありきの
 衣も多ありきの
 衣も多ありきの
 衣も多ありきの
 衣も多ありきの

後で男姑の跡と
 後で男姑の跡と
 後で男姑の跡と
 後で男姑の跡と
 後で男姑の跡と
 後で男姑の跡と
 後で男姑の跡と
 後で男姑の跡と

行更も稀なる
 増く地の家
 使を遣
 同とる
 親々

備へるべし
 一下の餘を
 美事自筆
 芳と母と
 作はる

A black and white illustration of a woman in a kimono with a star pattern, kneeling and painting a landscape on a scroll. She is holding a brush and applying ink to the scroll. The scroll depicts a landscape with bamboo and a butterfly. The background shows a simple room with a sliding door (shoji) and a small table with a vase of bamboo.

夜と昼食は調へ
 主は住て衣と冬席と
 掃子と育汚洗ひ
 常に家内と居る
 櫻小外と出づる

○本綿のものをいふ
 梁の代り姉のりふが
 物植を衣を延暦八
 年ぐもぬ小舟か
 のりふふのまき原を
 の唐より崑崙山の
 人よりと云りその
 指の指に実のり
 と極くしりむまは
 中比りその種失ては
 文源寺に種と傳て
 わねく成り綿と

と布をいふむい
 布に糸をいふき
 るぬ本綿今に給は
 近江の丹波の
 糸をいふき
 綿の糸をいふき



一卜女とつふふんと
 用也ー云甲斐るき
 卜病留ー思くて
 智あるふ好ぬ物
 云とけらるまの

本男姑小姑るむ
 我ふふ合ぬ事いふ
 根小流河せてまを
 却てまは病とつり
 婦人とー智ある

○禁裏の女のみわざ
 の一つは、草の種を
 草麻（くさあ）まといふむし
 二月（ふたつき）に種をいり
 皮（かわ）といひ、麻（あ）をいひ
 その表（うら）と裏（ verso ）をいひ、
 草（くさ）をいひ、麻（あ）をいひ
 の種（たね）をいひ、麻（あ）をいひ
 て是（こゝ）と煮（に）て、布（ぬい）
 布（ぬい）に織（を）る、布（ぬい）
 おく、是（こゝ）をいひ、麻（あ）
 と草（くさ）といひ、又（また）麻（あ）

あて是（これ）と任（まか）せ、い必（かなら）
 恨（うら）み、草（くさ）まといふむし
 主（お）れ、あ、い、他（た）人（ひと）
 草（くさ）まといふむし、恨（うら）み、
 草（くさ）まといふむし、恨（うら）み、
 草（くさ）まといふむし、恨（うら）み、



構（くま）て、下（げ）女（よ）の、同（どう）と、
 あ、あ、大（お）切（き）な、男（お）女（め）子（こ）
 小（こ）さ、う、う、の、親（おや）と、
 主（お）れ、う、う、は、若（わ）下（げ）女（よ）
 主（お）れ、う、う、は、若（わ）下（げ）女（よ）

思ふ者なりまゝく進
 出づべき所のなき
 必と親類の仲とも
 云はばけおとれを
 基とするものなり

魚うしほと又また卑ひき者ものと
 使つか母はの案き合あひあひあと
 多おほくそれと怒い罵ののるのち
 上うへがねあまとお腹はら
 之これと多おほくいていお

女中はひひと
いふつうとて
あつてしるを
あつてしるを
あつてしるを
あつてしるを
あつてしるを
あつてしるを
あつてしるを
あつてしるを
あつてしるを

肉静なりは
車わくわく
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる

あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる

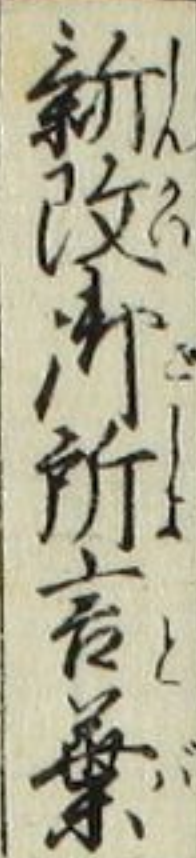
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる
あつてしる

あらあそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび

お氣に入らうとて
用ふもたぬもの
恨ふもたぬもの
一凡婦人ん様乃
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび

あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび

怒恨と人と諸と物
妖と智恵減ること
はあ様十人よ七八
必あり是婦人の
男に及ぶる取る自



小そでと	びぬく
おびと	かりど
よぎと	よるの物
うやと	ちやう
ぬのこと	おひえ
とこと	おさう
あぐと	ゆりど
あやーと	むつき
べおと	おいろ
いづと	おひや
こめと	うちぬき
めーと	ぐご
ほけと	くこん
とそと	むー
ととととと	さーざん
せきりん	こ目ぐご
もちと	うちん
ちまきと	ゆき
がとりと	おえぎ
わつきのちと	あつのちん
よのさのちと	くほのちん
ーんこと	あふいと

女男にむねを
とんこ おとこ ふうぶ おろろ

知^しる^る者^{もの}の^の後^{あと}に^に生^なず^るる

ついでとて毎つて

我々父子は矢と成

まじりの

三

くゑんふけ
おきぬえんさきの

父を
慕ひ
き

○釜のすゝ時
あわしと船

丑

成の

対

五
新
八

わ

○魂のりまを
る秋

本き丸くろに

火
云
ツ
の
山

七
ひ
ろ

七ツ
合と七

五
方
方
方
方

人の魂と

時よむ

人おまの

たしとわ

ひまび

ある

やぐのつま

ゆくよみてやぐの

つまをむき

い
て

古乃漢

うめ
えい
あ
あ
の

山と雲

男おとこ、天てん、子こ、孫そん、女に

あゝむねふしの

付つきておつもめとめ先ゆき立立て

わとしのち
我々
す

能く
し
る
を
る

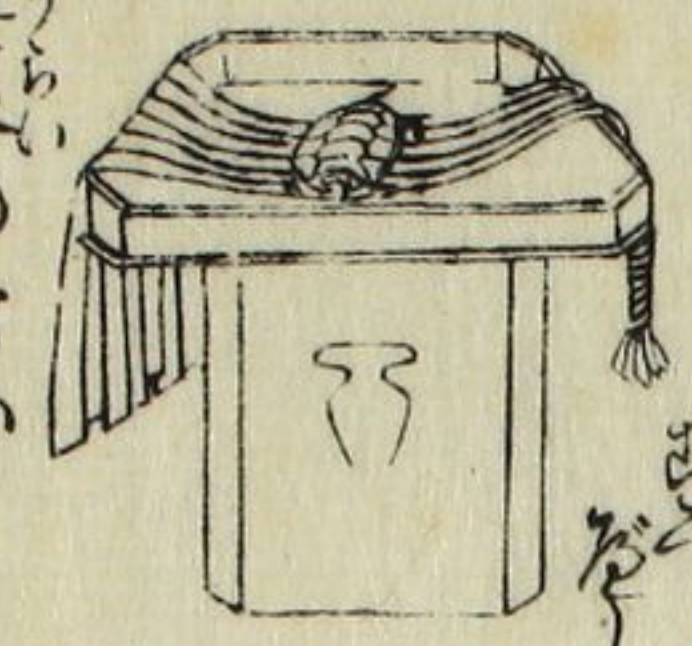
中
 有
 思
 也

三代ありき多と知うこ
 おくん者世常をい
 おうの務外交し
 七辰已ぬんよ
 智勢玉未と
 申大目上
 関いおどう
 成美みど佛
 〇門かに
 きうひこそ
 まうみきこふ
 いふのねれ
 やこめいきこが
 つるぞ
 燕しき

有く人よえりての
 侍どてともや遍と
 改免重く人よ備と
 ける様よお身よ様と
 海く入ふ海りても

祝言道具

千鮑
 やせきうこと
 人のたのめ



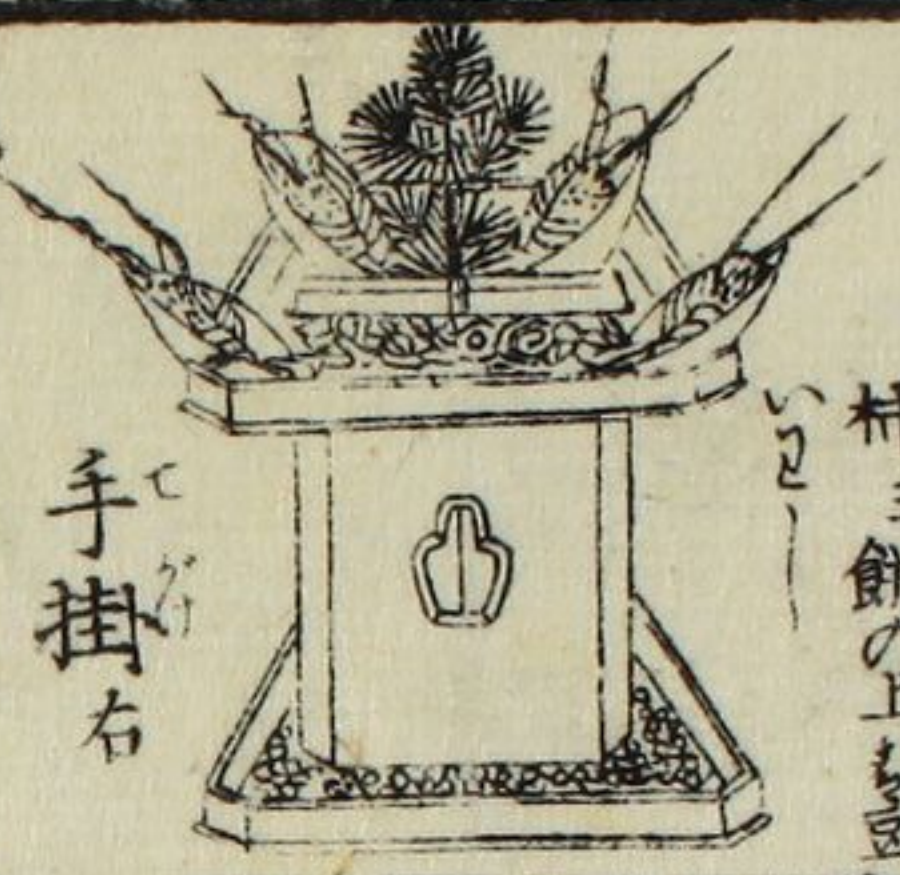
蓬萊のふい



腹を憤るもとわく能
 塩へく物と守り候む
 べりゆのやうなるは
 夫婦中自らわき
 け末水く連をひて

ナハナ
 〇三十三

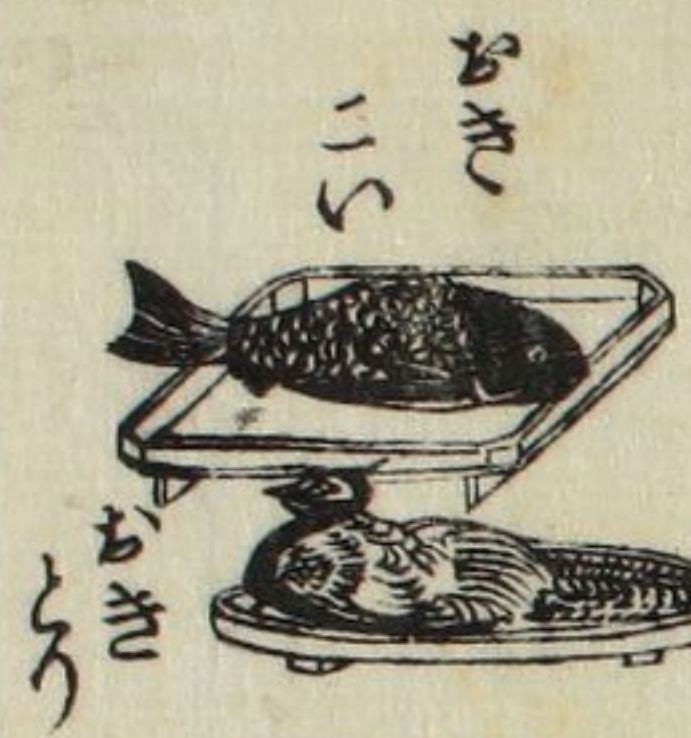
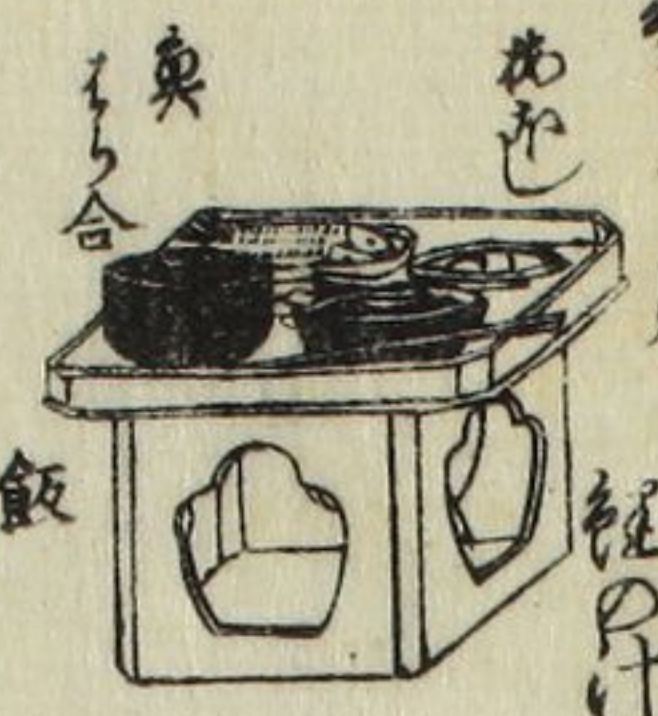
二重 左 海老昆布ニ
柑子三栗三
柿三餅の上も豆



ねえ紫衣をのりこ
いり二ツちう食せ
しそ低ふひことり
あ引を法
ひのうこと
張の口横
そへだ
くしこ
くしあひ
日きまらぬ
小とりやき
むまびの
うはが二

家内徳成
右條 惟時より能
べし書付て朽く
忘るゝとるし免
今世の人女子は
後服

郷食膳



道具が多て興て婚
姻せしむるより
牽くを能ぬも事生
身と保實成て事
人能百と出る女

高砂のふし



落のふし



子と嫁せむる事と知て
十日後も子と嫁む
事成知どもいと寛
るも如き人
は理と知らん

る書能訂出

嘉永四辛亥年三月新彫

發行

書林

東京日本橋通一丁目

須原屋茂兵衛

同日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

同神田末廣町

英文藏

同神田松住町

島屋平七

同浅草北東仲町

浅倉屋久兵衛版

